２０１０年3月３０日　担当　飯島聡

レーニン『帝国主義論』（１９１７＝２００６）　角田安正訳　光文社文庫

【論点】
- 「金利生活者国家」の形成過程とは？
- 帝国主義とは労働者階級をいかに分裂させるのか？
- 帝国主義による労働者階級上層部への懐柔はいかにおこなわれるのか？
- 帝国主義は労働運動に対して「勝利」を収めるのか？
- 「社会帝国主義者」の本質とはなにか？
- 帝国主義は自由競争を完全に排除することはできるのか？
- 帝国主義と民族主義やナショナリズムとの相関関係は存在しているのか？
- カウツキーの「超帝国主義」とは何か？

第八章　資本主義に見られる寄生と腐敗

【独占は技術改良の推進を妨げる】

＜資本主義的独占はあらゆる独占と同様に、どうしても停滞と腐敗に陥る傾向をまぬかれない。たとえ一時的にせよ、独占価格が確定する以上、技術面での進歩や前進の動機がある程度失われるし、それに連動してそのほかの面でも進歩の動機が希薄になる。そしてさらに、技術的進歩を人為的に妨げるための経済的余地が出てくる。＞

ｅｘ．アメリカのオーエンスによるガラス瓶製造機械の発明

⇒ドイツの瓶製造業者のカルテルによるオーエンスの特許の買占め

⇒独占は技術の改良を妨げる

【帝国主義は金利生活者の寄生を促進する】

＜帝国主義とは、莫大な額の貨幣資本が一部の国に集積することである。・・・それを温床として、金利生活者という階級――いや、正確に言うなら階層――が異常な成長を見せる。金利生活者とは、いかなる企業においても活動せず、無為に時を過ごすことを生業（なりわい）とする人々である。金利生活者の出現を助長するのは、資本輸出である。・・・資本輸出に起因して、金利生活者が生産活動から完全に切り離され、その状態が一層固定化される。また、海のかなたの南の国々や植民地の労働を搾取して生活している国は、全体的に、寄生の痕跡を帯びることになる＞

⇒　＜金利生活者の収入は、世界随一の貿易国が貿易によって得る収入の五倍にのぼる！＞

⇒　＜世界は、一握りの高利貸し国家と圧倒的多数の債務国とに分かれた＞

【ホブソンの帝国主義分析　――労働者階級に及ぼす影響――】

＜この露骨な寄生的政策を指導しているのは、資本家である。だが、資本家に作用するのと同じ動機が、ある特殊な種類の労働者にも影響を及ぼしている。大半の都市において、産業の最重要部門は政府発注に

依存している。＞（ボブソンの論考からの引用）
＜労働運動の内部でも、大半の諸国においてとりあえず勝利を収めた日和見（ひよりみ）主義者が、まさにそのような方向に向けて絶え間なく、また脇目もふらず「活動している」＞
＜帝国主義は、プロレタリアートの上層部を買収するための経済力を生み出し、そうすることによって日和見主義者を培養し、形成し、強化する。ただ、忘れてはならないのは、帝国主義一般もさることながら特に日和見主義に抵抗する勢力の存在である。当然のことながら、ホブソンの目にはそのような勢力は映らない＞

【帝国主義は労働者階級の上層部を懐柔する】

＜「二〇世紀初頭のイギリス帝国主義」を研究した例のブルジョア学者は、イギリスの労働者階級について語るとき、労働者の「上層部分」と「純プロレタリア的下層部分」を截然（せつぜん）と区別することを余儀なくされている。労働者の上層部分出身で、協同組合や労働組合、スポーツ団体、数多（あまた）ある宗教団体のメンバーになっている者は少なくない。選挙権はこの階層の水準に合わせて設定されている。イギリスでは、選挙権は「依然としてかなり制限されており、生粋のプロレタリアートである下層労働者は、それにあずかることはできない！！」のである。＞

【帝国主義は労働者階級の上層部を日和見主義へと追いやり腐敗させる】

＜原因は、この国〔イギリス〕が（一）全世界を搾取し、（二）世界市場を独占し、（三）植民地を独占していること。結果は、イギリスのプロレタリアートの一部が（一）ブルジョア化し、（二）おのれの指導者として、ブルジョアジーに買収された人々か、あるいは少なくとも報酬を受け取っている人々を迎えていること、である。＞
＜日和見主義は労働運動の全般的、根本的利益と相容れない。両者の対立は、経済的、政治的環境に煽られて激しくなるばかりである。＞

第九章　帝国主義批判

【帝国主義イデオロギーは最小規模の資本家や労働者階級まで浸透する】

＜ありとあらゆる有産階級が雪崩をうって帝国主義へと走るのはなぜか。第一に、金融資本が巨大な規模に達したという事情がある。金融資本は一部の人々の手中に集中し、広がりと目の細かさの両方において前例のないネットワークを作り出した。・・・それらの資本家の中には、中規模、小規模の資本家ばかりでなく最小規模の資本家と経営者も含まれている。もう一つの事情は、他国の金融資本家グループとの闘争の激化であるこの闘争は、世界を分割しようとする欲求、あるいは外国に対する支配権を確保しようとする欲求に端を発する。「だれかれを問わず」帝国主義の見通しに酔いしれ、帝国主義を必死に擁護し、帝国主義をできる限り美化する――これが現代の象徴である。帝国主義イデオロギーは労働者階級にも浸透している。＞

【帝国主義の政治的特徴とはなにか？】

＜帝国主義の基盤を改良主義的に修正することは可能だろうか。さらに前進することによって、帝国主義

の生み出す矛盾の深刻化を助長すべきであろうか。それとも、矛盾の緩和に向けて後退すべきであろうか。これらの疑問は、帝国主義批判の根本的な問題である。帝国主義の政治的特徴は何か。それは金融寡占性による抑圧が発生し自由競争が排除されることである。そして、それに起因して全面的な反動が起こり、他民族に対する抑圧が強まるということである。だからこそ二〇世紀初め、ほとんどの帝国主義において、プチブル的な民主主義に基づいて帝国主義に反対する一派が出てくるのである。＞

【反帝国主義者の盲点とはなにか？】

＜しかし、そのような〔帝国主義〕批判論が終始避けて通っていることがある。それは、帝国主義が資本主義の基盤であるトラストとの間に密接な関係を保っているということである。帝国主義批判論はまた、大規模資本主義とその発達に刺激されて出現する革命勢力に同調することをも恐れた。＞

【カウツキー流の反帝国主義言辞の盲点】

＜そこに見られるのは、帝国主義の矛盾を徹底的に分析し究明する代わりに、それを斥（しりぞ）け、避けようとする改良主義的な「他愛のない呼びかけ」だけである。＞

＜カウツキーは「反動的目標」「平和的民主主義」「単なる経済的要因の作用」を擁護することによって結果的に金融資本の時代を支持し、マルクス主義と訣別したと言える。なぜならカウツキーの掲げる目標は、客観的に見ると、独占主義的資本主義から非独占主義的資本主義へと事態を逆行させるものであるし、改良主義的欺瞞だからである。＞

【自由貿易の堅持は帝国主義への抵抗となるか？】

＜闘いは、自由貿易が保護貿易主義や植民地の従属的地位を打破しようとして起こっているわけではないからである。闘いは、ある帝国主義と別の帝国主義との間で、またある独占と別の独占との間で、さらにはある金融資本と別の金融資本との間でおこなわれているのである。・・・自由貿易や「平和的民主主義」に賛同しつつ議論をするなら、それは俗論に陥り、帝国主義の基本的特徴と属性を忘れることになる。そして、マルクス主義を小市民的改良主義にすり替えることになる。＞

【「超帝国主義的な」協調的同盟の実態】

＜「国際帝国主義」同盟あるいは「超帝国主義的」同盟は、・・・資本主義の現実の中にある。＞

＜かくして、二つの闘争形態が交互に現れるという状況が出現する。一方は協調的闘争であり、他方は暴力的闘争である。両方の闘争の発生基盤は同じである。いずれの闘争も、世界経済が世界政治との間で、帝国主義特有の交流や関係を深めていることに端を発するのである。＞

第一〇章　帝国主義の歴史的位置

【資本主義的独占の主要な特徴】

（1）独占は、生産の集中が非常に高度な発達段階に達したとき、それを母胎として成長を遂げた。

（2）独占体に煽られて、重要な原料資源の獲得競争に拍車がかかった。

Ex.石炭産業、製鉄産業

（３）独占は銀行の中から成長する。

⇒銀行は、決済の仲介を生業としる地味な機関から、金融資本を独占する機関へと変身した。

（４）独占は植民地政策の中から成長した。

⇒金融資本の登場により、植民地政策を促す旧来の多数の動機に新たな要素が加わった。原料資源、資本輸出、勢力圏をめぐる闘争がそれである。これらの闘争は要するに、有利な商取引、利権、独占利潤などの縄張りをめぐる闘争であり、究極的には経済的な縄張り一般をめぐる闘争である。

⇒アフリカの十分の九が（１９００年までに）占領され、全世界が分割済みになったとき、独占的な植民地所有の時代が避けようもなくやって来た。

【独占が資本主義の矛盾を深刻化させる】

＜独占的資本主義が出現すると、資本主義の矛盾がことごとく深刻化する。＞

ex.物価の高騰、カルテルによる抑圧の深刻化

【死に至る資本主義】

＜帝国主義は過渡期の資本主義である。いや、もっと正確に言うなら、死に至る資本主義である。＞

【帝国主義によって変化する、社会的な生産のあり方】

（１）大企業は巨大化する。

（２）原料は、生産に都合の良い拠点へと滞りなく運版されている。

（３）一つのセンターが指令を出し、一貫的な原料加工を全工程にわたって管理し、さまざまな最終製品を作り出すところまで面倒を見る。

（４）これらの製品は単一の計画に基づいて、数千万人ないし数億人の消費者の間で分配される。

⇒生産の社会化

【サン＝シモンの天才的推測】

＜「社会経済の広範な領域を大所高所に立って見渡すだけの力を備えているのは、中央経営委員会である。中央経営委員会は、社会全体の便宜を図るべく社会経済の規制をおこなう。また、生産手段をそれにふさわしい人々の手に引き渡す。そして特に、生産と消費の間に常に調和が保たれるよう配慮を払う。すでに現在、経済活動をある程度整理することを任務として引き受けた機関がある。それは、銀行である。」＞

〔補論〕

奥村宏著『最新版　法人資本主義の構造』（岩波現代文庫　２００５年）

＜株式外会社のはじまりは一六〇一年のオランダ東インド会社であるというのが大塚久雄氏の『株式会社発生史論』だが、当時の株式会社は国王の許可状によって設立される特権的な会社であり、そして株式総会に当たるものはなく、取締役専制であった。法律に従っていれば誰でも株式会社を設立することができるということになり、その株式会社の最高の決議機関は株主総会であるという株主主権の原則、そしてその株主総会は株主平等（一株一票）、資本多数決で運営されるという近代株式会社の原理が確立するのは一九世紀なかばからである。

この近代株式会社では株主はすべて個人であるというのがタテマエであったし、現実にもそうであった。個人資本家が大株主として会社を支配したのである。ところが、二〇世紀になって製造業などのような産業にまで株式会社が普及するようになり、巨大株式会社が出現するとともに株式が分散し、個人資本家が大株主として会社を支配するということができなくなった。そこからいわゆる経営者支配論が唱えられるようになった。

そしてさらに二〇世紀後半になると株式が法人や機関投資家に集中するようになった。一九世紀後半からの個人大株主支配の時代を近代株式会社の第一期とすれば、第二期は二〇世紀前半の株式分散による経営者支配の時代であり、そして第三期は法人と機関投資家が大株主になった法人資本主義、あるいは機関投資家資本主義の時代である。

こうして株式会社は発展し、巨大化していったが、その第三期において株式会社の矛盾が露呈し、もはや株式会社とはいえないようなものになった。そこでは株式会社が有限責任であるということを担保している資本充実の原則は崩され、無責任会社になっている。そして株主総会は形骸化して、株主主権、会社民主主義の原則は見る影もなくなってしまった。＞（Ｐ３０４－３０５）

【以上】